がちゃまん！

【第一話】

※この物語はフィクションです。
実在する人物等とは関係がございませんので、御理解をお願いします。

SE　ションヘル（織機）の稼働音

涼介「母さん、なんで教えてくれなかった！」

美佐紀「は？（語気強め）」

涼介「だからぁ、なんで教えてくれなかった」

美佐紀「聞こえない」

涼介「聞こえないじゃねぇし・・・・・爺ちゃん、いつ倒れたんだよ？」

美佐紀「その話か。三月（みっき）が過ぎたわ」

涼介「言ってくれよ」
美佐紀「勝手に出てったくせに」
涼介「そっちが縁を切ってきたんだ」
美佐紀「成功するまで帰らないんじゃなかったた？」
涼介「そういう嫌味が待ってるから、帰らなかったんだ」
美佐紀「ソニー・ロリンズみたいなサックス奏者になるって……」
涼介「（う）ッせぇなぁ！　爺ちゃん、今どこ？」
美佐紀「一宮総合病院、リハビリ病棟よ」
涼介「行ってくるわ。東京バナナ、事務所に置いといたから」
美佐紀「土産なんていらないし」
涼介「受け取っとけ。最初で、最後になる」
美佐紀「どういう意味？」
涼介「東京にはもう、戻らない……」

M

N「がちゃまん！　第一話。脚本、西田充晴。協力、葛谷聰。制作、一宮市民会館等指定管理者JNP一宮パートナーズ」

M　OUT

涼介（M）「爺ちゃんが、脳梗塞で倒れた。動脈が詰まり、大脳の左半球すべてと、前頭葉の一部がダメになった。一時は昏睡状態に陥ったという」

SE　ドア開く

親戚「涼ちゃんじゃない。一宮に帰ってきたんだね。待ってたよ」

涼介（M）「病室に入ると、親戚のおばさんがいた。オレに、連絡をくれた人だ」

親戚「茂さん、涼ちゃん来てくれたよ」

茂「ガ、ガガ」

涼介（Ｍ）「ベッドに横たわる爺ちゃんは、誰とも目を合わさず、ガガ、とだけ言った。おばさんの声につられて、反応しているだけにもみえた」

親戚「これでも奇跡の回復って、お医者さんは言うのよ。茂さん、お人形さんみたいになっちゃった……（悲しげに）ぜんぜん可愛くないけどね」

茂「ガ、ガガ」

涼介「あの、爺ちゃん言葉が……」

親戚「気になるよね？　茂さんは、言葉を失ってしまった。ガガ、としか言ってくれない」

涼介（Ｍ）「爺ちゃんが、魂の抜けた機械のような瞳を、オレに向けてくる」

涼介「あの、心、ていうか、感情は……」

親戚「あると思う。きっとある。ガガ、にも違いがあるみたいだし。楽しいときのガガ、悲しいときのガガ」

涼介「爺ちゃん、喋れるようにならないんで

すか？」
親戚「正直に言うね。それは無理みたい」
涼介「そんな……」
親戚「社長がこんな状態だし、工場も閉めちゃうんだってね？」
涼介「え？」
親戚「聞いてない？」
涼介「なにも」
親戚「尾藤毛織工業、四連のこぎり屋根、創業は大正一〇年、もったいないとは思うけど……継ぐ気は、ないんでしょ？」
涼介「えぇ、随分前に決めたことです」
親戚「従業員、どうするんだろう？　二〇人はいたじゃない」
涼介「自分人生もままならないのに、二桁の人生なんて背負えませんよ」
親戚「音楽家になるんだっけ？」
涼介「それは、やめました」
親戚「やめた？」
涼介「オレ、三〇まで爺ちゃんの仕送りで生

活してたんです。どう思います？」
親戚「うちの子なら、勘当モノだわ」
涼介「されましたよ、母さんから」
親戚「美佐紀さんも気ぃ強いからね。女手一つで涼ちゃん育ててさぁ」
涼介「感謝はしてますよ。ただ・・・・・・」
親戚「ただ？」
涼介「別れた親父が、売れないバンドマンだったらしく、オレとかぶるみたいで・・・・・・」
親戚「だから上京に反対したか」
涼介「親父と一緒にすんなって、思ったけれど、結局オレも同じ。這い上がれませんでしたね」
親戚「夢なんて追いかけるもんじゃないよ。それより、今ここでね、埋もれてる夢をさ、掘り起こしたほうがいい」
涼介「埋もれてる、夢・・・・・・」

ＳＥ　ションヘルの稼働音

満里奈「涼介ぇ！　満里奈を、もらいに来てくれたんでしょ！」
涼介（Ｍ）「実家に戻ると、織機の音が響き渡る事務室で、幼馴染みの真鍋満里奈と再会した」
満里奈「ねぇ、式はいつにする？」
涼介「腕を引っ張るな。式って？」
満里奈「結婚式に決まってんじゃん」
涼介「結婚式？」
満里奈「とりあえず籍だけでも入れようよ」
涼介「なんで？」
満里奈「許婚でしょ」
涼介「は？　許婚だった覚えはない」
満里奈「やだなぁ、若年性認知症？」
涼介「（ン）なわけあるか」
満里奈「もっと早く帰ってきてよね。三〇までには結婚するつもりだったのにぃ。ま、二歳程度は誤差の範囲としよう」
涼介「おまえ結婚してねぇの？」
満里奈「だからぁ、涼介を待ってたんだよ」

涼介「彰と付き合ってたじゃん」
満里奈「別れた。それ、かなり昔の話なんだけど」
涼介「おまえ、クラスのヒロインだったし、男なんてさ、選り取り見取りだろ？」
満里奈「あのねぇ、大事なこと忘れてない？」
涼介「大事なこと？　性格か」
満里奈「違うって！　うちの実家お寺でしょ。創業は、尾藤毛織より古いんだから」
涼介「それが？」
満里奈「涼介なら、お坊さんになってくれるでしょ」
涼介「だから、腕を引っ張るなッ」
美佐紀「お坊さんかぁ。悪くないわね」
涼介（M）「振り向くと、母さんが台帳片手に立っていた。隣に、爺ちゃんの相棒、片岡のおじさんもいた。こちらも、超久しぶりの再会だ」
美佐紀「満里奈ちゃんには、うちの経理を頼んでるんだけど、テキパキ働くし、イイ奥

さんになると思うわ」
満里奈「でしょう、お母様」
涼介「お母様？」
美佐紀「あんた無職でしょ？　東京には帰らないとか言って、仕事にあぶれたんじゃないの？　よかったじゃない、働き口がみつかって」
片岡「お坊さんって、安定してるしなぁ」
満里奈「片岡さん分かってるぅ。これからの時代、介護か、お葬式」
涼介「めちゃくちゃ言ってんじゃねぇよ」
満里奈「お母様も認めてくれたことだッしぃ、あとはハンコ押すだけだね。はいッ」
涼介「はいッて、なにこれ？」
満里奈「知らないの？　婚姻届」
涼介「なんで持ってんの？」
満里奈「常時裏ポケに入れてる」
涼介「マジか」
満里奈「だってみんな、お坊さんになってくれないいんだもん。逃げちゃうんだもん。善

は超急げ」
涼介「それが原因で、逆に引いてると思うぞ、みんな」
片岡「イイなぁ、若いって。涼介君はモテるなぁ。おじさんもあと半世紀若けりゃ」
涼介「どンだけですか、それ」
片岡「今年で古希だよ。あ、そうだ、ちょうど七夕祭りやってるじゃない。二人で行ってきなぁ。ねぇ、美佐紀さん」
美佐紀「そうね、本日は残業なしだ」
涼介「なんでこいつと？」
満里奈「行ってきま～す」
涼介「腕引っ張るなって！」

SE　七夕祭りの雑踏

涼介（M）「七夕飾りで彩られた夜の本町アーケードを、満里奈と二人で歩くのは高二の夏が最後だったな、と思い出す。あの頃はたぶんオレ、満里奈のことが好きだった。

言わなかったけれど……」

満里奈「社長と、会ってきたんでしょ？」

涼介「うん、会ってきた」

満里奈「ショックだよね？」

涼介「そりゃまぁ、胸をえぐられるくらいの衝撃は受けたさ。爺ちゃん、オレのことわからないみたいだし……」

満里奈「みんな、社長は赤ちゃん返りしたって言ってるよ」

涼介「赤ちゃん返りっていうか、目は合わせてくれないし、ガガッしか言わないし、正直、爺ちゃんが剥製になっちまったように感じた」

満里奈「こんなことって、あるんだね」

涼介「植物状態でもおかしくないくらい、脳の損傷がひどいって……せめてもう一度爺ちゃんと話がしたいよ。言わなきゃいけないことが、あるんだッ」

涼介（M）「商店街を抜けると、尾張国の一宮と呼ばれた真清田（ますみだ）神社がある。もちろん、

一宮の地名はこれに由来する。境内に入ると、早速オレは爺ちゃんの回復を祈らずにはいられなかった。この世界には神様がいるって、信じさせてほしい」

満里奈「（パンパンと柏手）こどもは男の子一人、女の子一人がいいです」

涼介「願い事が声に出てるぞ。ていうか、こども二人って、おまえどんだけ先走ってんだよ」

満里奈「涼介は、なに願ったの？」

涼介「決まってんだろ」

満里奈「私との入籍かぁ、照れるねぇ」

涼介「違う」

満里奈「即答かよ」

涼介「お腹空かない？」

満里奈「それなりに」

涼介「なんか食ってく？」

満里奈「だねッ」

涼介（M）「一宮の七夕祭りは、『おりもの感謝祭』という。織姫さんの仕事は機織り

だし、もともと一宮は繊維で発展したマチだし、真清田神社には織物の神様が祀られているし、まさに織物つながり、つながりまくり。爺ちゃんにとっては、この七夕祭りが元旦だったという」

満里奈「涼介、なんかあのキャバ嬢みたいな人、こっち睨んでるよ」

涼介（Ｍ）「本日は、土用の丑の日。尾藤家行きつけの店で、鰻丼を食ってると、カウンター席に……」

涼介「食べた？」

満里奈「え？」

涼介「食べたよね」

満里奈「まだ半分」

涼介「もういいだろ。店変えよう」

満里奈「はい？」

涼介「行くぞッ」

葵「逃げるんだッ！」

涼介（Ｍ）「女が席を立ち、鬼形相で寄ってくる。神楽坂葵、元カノ、つーか三日前に

別れたばかり・・・・・」

葵「『葵は完璧すぎてオレにはもったいない』とか、調子のいいこと言っちゃってさぁ、ホントの理由は、コレだったんだ！」

涼介「おまえなんでここに・・・・・」

葵「実家くらい、簡単に調べがつく」

涼介「行ったの？」

葵「こっちに来てるって言うから」

満里奈「あのぅ、そこのオバサン！　うちの涼介に、なんの用ですか？」

葵「オバサン？　オバサンって誰？」

満里奈「ユー！」

葵「私、二九ですけど」

満里奈「あ、ごめん。化粧濃いし香水キツイし、人生に疲れてる感あるしバツイチ感あるし、年上かと思った」

葵「べつに人生疲れてないしバツゼロだし、ていうか、うちの涼介ってなに？」

満里奈「だってうちのでしょ。婚約してんだし」

葵「婚約？　それはこっちのセリフ。涼介と婚約してんのは、私！　泥棒猫！」
満里奈「猫嫌いだし、やめてくれない」
葵「泥棒犬！」
満里奈「犬に代えろって言ってってんじゃないから」
葵「涼介、どういうことッ！」
涼介「（店主に）お代はココに置いときます」
店主「涼ちゃん大きくなったねぇ。また来てね」

SE　自動ドア開閉（出入口）

葵「あ、逃げた！」
涼介（M）「と、言われましても、兵法三六計逃げるにしかず。表に出て、身を潜めているると、目の前を、葵と満里奈が走り去っていく、ふぅ……」
涼介（M）「かと思いきや、満里奈にみつかった。こいつは、獣並みに鼻がきく」
満里奈「あの人、なんなの？」
涼介「正直に言う。たちの悪いストーカーに

つかまった」
満里奈「マジか？　東京って怖いね」
涼介「ダチが婚活パーティの司会やってて、メンズが足りねぇから参加してくれって頼まれて……」
満里奈「そこで、憑りつかれた？」
涼介「イエス！　とりあえず今日は、ここで解散しよう」
満里奈「家に戻ったら、先回りしてあの人いるんじゃない？」
涼介「たしかに……」
満里奈「うちへ来なよ。坐禅教室で使ってる禅堂あるし、こっそり泊まれるよ」

SE　夏の夜、蛙が鳴く

涼介（M）「葵とは、ライブハウスで出会った。オレのサックスを、一番最初に『いいね』と言ってくれた人だ。オレもあいつのヴァイオリンが好きだ。音に、気高さがあ

る。二人でセッションするようになり、サックスにヴァイオリンという、異色のユニットで舞台に立った。それなりに人気も出た。音楽でメシを食ってくという夢に、近づいてる気がした。けれど、そいつは幻想だった。オレと葵の関係が噂になり、広まると、チケットが売れなくなった。みんな葵のファンだった。優雅なドレスをまとい、からだをくねらせて演奏する葵の立ち姿はミューズ降臨とかなんとか、ツイートされてたし……オレたちは、イロモノでしかなかった。彼氏つきのアイドルには、誰も寄ってこない。みんなが求めていたものは、オレの音楽じゃなかった……」

SE　鐘の音

道信「涼介君、これはどういうことかな？」

涼介（M）「いつの間にか眠ってた。朝の陽光が、禅堂に射し込んでくる」

満里奈「涼介、おはよう」

涼介「え、えぇえ！」

涼介（Ｍ）「畳の上で、オレは横になっていたんだが、なぜかしら隣に、というか、満里奈が抱きついている」

満里奈「やだ！　エッチぃ！」

涼介（Ｍ）「掛け布団をめくると、満里奈は下着姿だった」

道信「説明してもらおうか、涼介君ッ」

涼介（Ｍ）「スキンヘッドの厳つい親父が、仁王立ちしている」

道信「まさか一線を越えたんじゃあ、ないだろうなぁ！　あぁあ！」

涼介「越えてませんよ」

満里奈「越えましたッ。一線どころか二線も三線も越えました。車線変更しまくりです」

涼介「嘘つけッ」

満里奈「嘘じゃない、ひどい！」

道信「男として、責任はとってくれるんだろうなぁ！」

涼介「責任もなにも……」

道信「（遮って）問答無用！　どんなに言い逃れしようと、家政婦はみていないが、お釈迦様はみていたぞ、ここで！」

涼介（M）「肩を怒らせて、スキンヘッドが禅堂から出ていく」

満里奈「お父さんも認めてくれたわけだッしぃ、結果オーライだね（笑）」

涼介「おまえ、オレをハメたな？」

SE　ションヘルの稼働音

涼介（M）「禅寺に軟禁されてたオレは、鴻門（こうもん）の会を脱出した劉邦（りゅうほう）のごとく、トイレのフリして逃げ出し、どうにか実家に戻った、が、ここでも……」

葵「涼介ッ、昨晩どこに泊まったの！」

涼介（M）「まさに前門の虎、後門の狼、というやつで、葵が待ち構えていた」

葵「浮気なんて、絶対許さない！」

涼介「浮気じゃねぇし。誤解だって」
葵「鰻丼食べて、精力つけてた！」
涼介「そういうやましい意図はない」
葵「あのね、私は涼介との結婚、本気で考えてたんだけど」
涼介「こんなオレと一緒になったって、なんのメリットもないだろう」
葵「メリット？　意味がわからない。私のこと、もう好きじゃなくなった？」
涼介「お父さんが許してくれないよ、絶対」
葵「そこを突破してよッ」
涼介「それは三八度線を越えるより難しいミッションだと思う」
美佐紀「葵さんッ、どこ行ったの？」
葵「あ、お母様」
涼介「お母様？」
涼介（M）「事務所の奥から、母さんが葵を呼びに出てきた」
美佐紀「ションヘルみたいんでしょ？　手が空いたから、案内するけど」

葵「は～い」

涼介（M）「母さんと葵が、まるで親子のように和気あいあいと、のこぎり屋根の中へ入っていく。どんな関係になってる？」

葵「すッご～い。生ションヘルだぁ。はじめてみるぅ」

美佐紀「葵さん、詳しいのね」

葵「私、コム・デ・ギャルソンってブランドが好きなんですけど、デザイナーの川久保玲さんって、国産の生地を大切にされてるじゃないですか。だから知ってるんです。ションヘルって、織るスピードは遅いけれど、糸を強く引っ張らないから、柔らかな風合いがでるんでしょ？」

美佐紀「そう、そのとおり。うちにはションヘルが一〇台あるけど、みんな御歳（おとし）は百歳の旧式よ。私が生まれる前から動いてる」

涼介「なんか、超マニアックな話になってね？ムカデ・・・なんだっけ？」

葵「ムカデじゃない、コムデ、ていうか、知

らないの？　ホント、ファッションに無関心なんだからぁ。ちなみに私今、全身ギャルソンですけど」

涼介「ふ～ん」

葵「『ふ～ん』って、ギャルソンは世界のトップブランドだよ。私、川久保玲さんが愛知県木曽川町の工場について語ってたのを聞いたことがある。尾州織物がギャルソンを支えてたんだって驚いたし、それだけココの生地が高品質ってことなんだよ」

美佐紀「尾州織物も知ってるんだ」

葵「当然ですよ。毛織物の世界三大産地」

美佐紀「なんか嬉しくなっちゃうね。企業秘密だから言えないけど、うちだって国内外のトップブランドと契約してるわよ」

葵「え、どこですか、気になるぅ」

美佐紀「内緒。そうだ、いい機会だから、ちょっとだけションヘル、動かしてみる？」

葵「いいんですか？」

涼介（M）「まったくついていけない。完全

に浮いちまったオレは、ひとり事務所に戻って、コーヒーを淹れて、『気にしない、気にしない、ひと休み、ひと休み』してたら、本日は遅番の満里奈が出勤してきた。うっかりしていた。当然・・・・・」
葵「なんであなたがここにいんのよ！」
満里奈「そっちこそ！」
涼介（M）「修羅場る・・・・・」
美佐紀「涼介、葵さんのお父さん、東京セントラル銀行の役員なんだってね。しかもあんた、婚約してんだって？　隅に置けないねぇ。ゴールインしちゃいなさい」
満里奈「ちょっと！　お母様、どういうことですか」
美佐紀「逆タマだわぁ！」
満里奈「涼介は、お坊さんになるんです！」
涼介「おい、腕を引っ張るなッ」
美佐紀「満里奈ちゃんゴメン。涼介は大手の銀行マンになります！」
涼介「母さんまで腕引っ張るのはやめろ」

満里奈「お坊さんになるんですッ」
美佐紀「銀行マンでしょ。一宮支店もあるし」
葵「どうやら、私の勝ちみたいね」
満里奈「きぃいい！」
葵「猿か、あなたは。おうちに、いや、モンキーパークへ帰りなさい」
満里奈「あのね、私は仕事に来てんの！　ここ、私の職場。つーか、あなたって言うな。私には、真鍋満里奈っつー名前がある」
葵「じゃ、真鍋でいい？」
満里奈「呼び捨てかよ。年上だぞ」
葵「お母様、私もここで働かせてください。花嫁修業になりますし」
満里奈「花嫁修行、はぁあ？　冗談じゃない！　ホントあんた、ストーカーだわ」
葵「誰がストーカーよ」
満里奈「だって涼介が、そう言うんだもん」
葵「涼介、どういうこと？」
涼介「言ってない言ってない。ストーカーじゃない、スモーカー」

葵「タバコ吸わないし」

満里奈「あんたに任せられる仕事なんて、うちの会社にはないから！」

葵「真鍋は社長か？　私はお母様に訊いてンの。（美佐紀に）なにか私にも、手伝わせてください」

美佐紀「う～ん、そう言ってくれるのはありがたいんだけど、ここはもう、閉めちゃうしね……」

葵「閉める？」

美佐紀「つまり廃業ね、廃業」

葵「え、どういうことですか？」

美佐紀「儲かる仕事じゃないから……」

葵「トップブランドとの取引があるって……」

美佐紀「あるにはあるけど、旧式の織機（しょっき）じゃ、いくらも織れないし。かといって品質を捨て、大量生産できる高速織機を入れたところで、人件費の安い海外には勝てっこない、でしょ？」

葵「そんな、やめちゃうなんて、もったいないですよ！」

美佐紀「そう思ったから、今日まで続けてきたんだけど……社長が、お爺ちゃんがね……」

涼介「そこはオレから言うよ。爺ちゃんが、倒れたんだ。だからオレは東京を離れることにした」

葵「え？　意味わかんない。跡を継ぐってこと？　え？」

涼介「継がないし、音楽もやめる。オレの挑戦は終了したんだ。爺ちゃんが応援してくれるから、中途で投げだすわけにはいかなかった……」

葵「なにそれ。お爺ちゃんのために演奏してたってこと？」

涼介「最後は、そうなってたかもしれない」

葵「そんなの私、認められない」

涼介「もっと上を目指すなら、オレの他に、ふさわしい相手がいるよ」

満里奈「そうそう、他にもいるから、男なんて、たーくさんッ」

葵「真鍋は入ってこないでッ。工場は継がない、音楽はやめる、もうわけわかんないッ。お母様、なにか言ってやってください」

美佐紀「音楽では生活できないでしょ。やっと現実をみたか、って感じ」

葵「お母様……」

美佐紀「会社だって、無理に継がなくていいのよ。うちはね、尾藤一座って言われるくらい、お爺ちゃん中心でまわってたから。ありえないのよ、船長のいない船で、大海原に出るなんて。やめ時だと思う。無理に続けて先祖代々誇ってきた、この尾藤毛織の名を汚すわけにもいかないし。何事も引き際が肝心なのよ」

葵「工場、ホントにやめちゃうんですか？」

美佐紀「買い手もついたし」

葵「買い手が？」

美佐紀「とある運送会社がね、倉庫に使いた

いって」

葵「そんな、ぜんぜん違う用途じゃないですか。真鍋、あなたはそれでいいの？　会社がなくなったら、仕事もなくなるよ」

満里奈「残念でしたぁ。私は涼介と、お寺をやるんだも～ん」

葵「話にならんし。涼介はそれでいいの？」

涼介「このオレに、なにか言う資格はないだろう」

美佐紀「葵さん、そんな辛気くさい顔しないで、笑って。あと半月、お盆を前にして、

尾藤一座は、かいさ～ん！」

葵「『かいさ～ん！』って、そんな・・・・・」

SE　ションヘルの稼働音

涼介（M）「七月末日、工場を倉庫にするとかいう運送会社、美樹本運輸の女常務と、人相の悪い手下が下見に来た。母さんが冷たい飲み物を出すように言うから、オレは

熱っついコーヒーを淹れてやる」
常務「奥さん、ちょうどいい広さだったわ。気に入った。なかなか買い手がつかなくて困ってたんでしょう？　もらってあげる」
美佐紀「ありがとうございます」
涼介（M）「母さんが、へこへこ頭を下げる」
部下「常務、あの機械どうします？」
常務「廃棄するのも億劫だし。そうねぇ。奥さん、誰かもらってくれる人いない？」
美佐紀「わかりました。あたってみます」
常務「よろしく頼むよ」
涼介（M）「上から目線でふんぞり返る、常務の名前を名刺で確認したら、『美樹本優子』って書いてあった」

ＳＥ　ションヘルの音

次第に大きくなり、ＯＵＴ

《第一話了》

【第二話】

SE　鹿威しの音

道信「涼介君、わしのようになるには、専門道場に三年は籠ってもらわんと」

涼介（M）「オレは、年季の入った禅寺の書院で、満里奈の親父に会っていた」

涼介「あの、何回も言いますけど、オレ坊さんにはなりませんから」

道信「はぁあ？　わしの一人娘を、純潔を穢しといて、そんなこと言うのか。君は畜生にも劣るなぁあ！」

涼介「細かいツッコミですけど、純潔じゃないですよ。そこそこ汚れてるかと」

道信「（茶卓をドンと叩き）誰でもいいんだ、この際！　さっさと修行に出なさいッ。そして君が、わしの跡を継ぐ」

涼介「誰でもいい？」
道信「……すまん、つい感情的になってしまった。一宮は久しぶりだろう。どうだ？モーニングでもしないか？」

ＳＥ　車が走る

涼介（Ｍ）「一宮は、モーニング発祥の地だ。オレも、朝はコーヒー＆卵がないと、一日がはじまった気にならない」

ＳＥ　車、停止

道信「涼介君、着いたぞ。降りなさい」
涼介「ここ、喫茶店じゃないでしょ！」
涼介（Ｍ）「妙林寺の門前だった。丸坊主の若衆たちが五六（ごろく）人、スタンバっていた」
道信「雲水たちだ」
涼介「うんすい？」
道信「修行僧だよ。君の、お友達になる」

ＳＥ　車のドア開く

涼介「ちょっと！　なにすんの！」

道信「三年後に会おう！」

涼介（M）「雲水たちに羽交い絞めにされて、オレは強制連行されていく。こんなことが法治国家日本であっていいのか？」

道信「禅はイイものだぞぉ。俗世の煩悩をすべて捨て、清らかになって帰ってこい」

涼介「あんたこそ煩悩の塊でしょ！」

SE　蝉の声と鐘の音

涼介（M）「妙林寺の創建は室町時代。宗派は臨済宗。住職を育成する僧堂をもつ。妙林寺の親分・妙慧(みょうえ)老師と満里奈の親父がお友達で、オレの拉致計画が密かに練られていたという。雲水を問い詰めたらゲロった」

老師「尾藤毛織の御曹司が禅門に入るとは、どういう風の吹き回しかな？」

涼介（M）「天井に龍が描かれた、法堂(はっとう)というお堂で、老師がオレを待っていた」

涼介「禅門なんて、くぐりませんよ」

老師「だったらなぜここへ？」
涼介「あなたが連れ込んだんでしょ！」
老師「冗談だ、怒るな。『娘の旦那を鍛えてほしい』と、あいつに頼まれてな」
涼介「旦那じゃないですよ。ていうか、付き合ってすらいません」
老師「そうか。しかし、どうせそんなことだろうとは思っていた。君で三人目だ、犠牲者は」
涼介「だったら、あのハゲに協力しないでくれます？」
老師「べつに協力したわけじゃない。君の祖父・茂と私は同級生でね、君とは一度会ってみたいと、前々から思っていた」
涼介「爺ちゃんの、同級生？」
老師「茂の状態は、知ってるだろ？」
涼介「えぇ、もちろん」
老師「今のあいつは、まるで蝉の抜け殻だ。どんなに語りかけても、なにも返ってこない」

涼介「以前のようには、もう戻らないって・・・・・」

老師「辛いな・・・・・・だからあいつに代わり、君に伝えておきたいことがある。茂の、両親の話だ。聞いたことないだろう？」

涼介「そういえば、ないですね・・・・・・」

老師「茂は、一宮空襲で母を失った。未映子という。夫の治は尾藤毛織の二代目だ。当時は軍服をつくらされていたが、戦争が終わったらと、新しい時代に備えて、誰もみたことのない生地を、二人で追い求めていた。ところが空襲で会社が焼けてしまう。未映子はアイデアがぎっしり詰まった生地の設計図を取りに戻り、そこで帰らぬ人となった。戦後、人々は洋装を好むようになり、既製服が出回り、繊維産業が空前の好景気を迎えた。いわゆる『がちゃまん』だ。耳にしたことはあるだろう？」

涼介「あるような、ないような・・・・・・」

老師「機織り機がガチャンと動けば万のカネ、

いい時代だったと回顧する人もいるが、そんな世間の片隅で、治は酒びたりになった。テキスタイルの天才だったというが、生地の設計図が描けなくなっていた。理由が、わかるか？」

涼介「その設計図のせいで・・・・・・」

老師「そうだ、妻が焼かれてしまったんだ。茂が一六になったとき、治は不治の病に侵された。病床の治は半狂乱で『もう一度、あの生地がみたい。未映子と一緒に織った、あの生地がみたい』と、うなされていたらしい。茂は見よう見まねで設計図を描いては、父のもとへ届けた。が、当時の茂では無理だ。治の遺言は『おまえなら、きっとやれる』だったという。会社は親戚が継いだが、茂が成人すると譲られた。以来、茂は一心不乱に働いた。父と母がみつけたという生地を、最高の生地を、蘇らせたいと思っていたんだろう。あるとき、茂は私にこう言った。『父との約束を果たした』と。

茂は自ら織った生地を、両親の墓前に供えた」

涼介「爺ちゃんの過去に、そんなことがあったんですね……」

老師「知れば重荷になると思い、語らなかったのだろう。つまりあいつは、君に家業を継ぐ意思がないことを、よくわかっていたんだ。ところで、茂がみつけたというその生地を、みてみたいとは思わんか？」

涼介「もちろん、みてみたいです」

老師「君の、目の前にある」

涼介「え？」

老師「いま羽織っている、この着物がそうだ。私にも多少の蘊蓄（うんちく）はあってね。ションヘルは古い機械だが、ゆっくり織るから空気を含み、生地が柔らかく、着心地よくなるというじゃないか。しかし茂はそうじゃないと言う。機織りは経糸に緯糸を通すことだが、そのとき、織手の心もまた一緒に織られていくと、茂は言う」

涼介「心が、織られていく？」

老師「そうだ、心だ。だから量産品の生地とはモノが違う。心が入ってないからな。いわば私は、あいつの心を着ているんだよ、今も、こうしてな・・・・・・」

SE　砂利を踏む音

涼介と雲水が歩く

雲水「もう帰っちまうのか。せっかく子分ができたと思ったのに」

涼介（M）「頼んでないのに、雲水が見送ってくれる。案外イイやつ」

雲水「せっかくだからさ、禅ってものがなんなのか、教えてやるよ」

涼介「結構です。興味ないんで」

雲水「まぁそう言うなよ。老師がさ、禅とは、『本当の生活に気づくことだ』って言うんだわ」

涼介「意味わからんスね」

雲水「道元禅師に、こんな歌がある。『春は花、夏ほととぎす、秋は月、冬雪さえて冷（すず）しかりけり』。冬に雪が積もったらさ、暖房を切ってみろ」
涼介「寒くて死ぬし」
雲水「その寒さが、冷しさに変わるとき、そこに、本当の生活があるんだろうよ。なぁオレ、イイこと言ってない？」

SE　ションヘルの稼働音

涼介（M）「禅寺で、よもやよもやの拉致をくらい、無事帰宅すると、運送会社の常務、美樹本優子が来ていた」
美樹本「それじゃ奥さん、また来ます」
美佐紀「ご指示どおり、契約書は直しておきます」
美樹本「よろしく頼むわ・・・・・ン？　こんにちわ」
涼介「・・・・・」

美樹本「なによ、無視？　私のことが気に食わないって、顔に書いてあるけど」
涼介「べつに、そんなことありますよ」
美樹本「あります？」
涼介「ありませんよ」
美樹本「社長が、昏睡状態だって？」
涼介「違いますよ。意識はあります」
美樹本「自分が誰かもわからないんでしょ？　それを意識があるって、言うのかしら？」
涼介「そんな言い方・・・」
美樹本「会社を畳むきっかけをもらったと、前向きに考えなさい。私だって多少の同情はしている。天下の尾州織物も、機屋の数は全盛期の十分の一っていうじゃない。日本はもう、貧しくなった。一人当たりのGDPは世界のトップ二〇に入らないし、賃金だって上がらない。高級品が売れる時代はね、とっくに終わったのよ。みんな安くて、そこそこイイものを欲しがっている。そこそこでいいのよ、そこそこで」

涼介「それは……違うと思います」

美樹本「そうかなぁ？　現に君たちの工場は、なくなる……なに？　その目は」

涼介「みんながそこそこでいいと思うなら、オレたぶん、プロになれてますよ」

美樹本「は？　なんの話？　恨むなら、時代の流れを恨みなさい。じゃあね」

満里奈「いけすかないヤツぅ」

涼介（Ｍ）「美樹本の背中が、おもいっきり遠のいたところで、満里奈が寄ってきた」

涼介「母さんも、あんなヤツに頭下げることないだろ」

美佐紀「頭下げるのは、タダでしょ」

涼介「そういう問題じゃ……」

満里奈「あの、前から思ってたんですけど、工場をたたむくらいなら、片岡さんに譲っちゃうとか？」

美佐紀「もう聞いたわよ。『老兵は去りゆくのみ』、だって。若い衆はというと、よそへ移るとか、いろいろね」

満里奈「そっか・・・・・・」
涼介「爺ちゃんの考えは？」
美佐紀「お爺ちゃん？　訊けるわけないじゃない」
涼介「そうじゃなくて、なんて言ってた？　こういうとき、どうするって」
美佐紀「ノープランね。結局、ワンマンだったのよ。それが良い方へ行くときもあれば、悪い方へ行くときもある」
涼介「だったらオレ、爺ちゃんに訊いてみるよ。尾藤毛織は戦後、爺ちゃんが父親から受け継いだ会社なんだろ？　どうするかは爺ちゃんが決めることなんだ。そう思った」
美佐紀「訊くって、どうやって？」
満里奈「涼介ぇ、だったら私もついてくぅ」

SE　車が走る

涼介（M）「翌朝、オレは母さんから車を借り、一宮総合病院へ向かった」

満里奈「あのさぁ、なんであんたがいんの？

葵「なにか問題でも？」

涼介「葵の姉貴は医者なんだ。こういうとき、

そばにいてくれると頼もしい」

葵「そういうこと」

満里奈「お姉さんの話でしょ！」

SE　ドア開く

涼介（M）「相変わらず、爺ちゃんはベッド

に横たわったままだった。反応がない。目

は開けているが、外界との接続が完全にシ

ャットダウンされてる感じで、すぅ、すぅ

という呼吸音だけが、生きてるんだってこ

とを教えてくれる」

葵「お爺ちゃん、はじめまして」

茂「……」

葵「お爺ちゃん、はじめまして」

茂「……」

満里奈「聞こえてないと思う」

葵「え？」

涼介「ずっとこんな感じなんだ。どうすればいいと思う？」

葵「どうすればって……」

涼介「どんなことでもいいからさ、なにかアイデアない？」

葵「そうねぇ……外へ、連れ出しちゃうとか？　ダメ？」

涼介「外へ？」

葵「なにか刺激があったほうがいいと思う。なにもない部屋にずーっといたら、私たちだってボーッとしちゃうじゃない」

涼介「やってみる価値は、あるか」

涼介（Ｍ）「オレは、車椅子を借りに、看護士さんを探しに出た…部屋に戻ってみると、なにがあったか……」

ＳＥ　ドア開く

満里奈「東京育ちだからってねぇ、お高くとまってんじゃねぇよ！」

葵「悪かったわね、美人で！」

満里奈「誰がそんなこと言ったッ・・・・・・あ、涼介ぇ、お帰りなさい（甘え口調）」

涼介（Ｍ）「二人は髪の毛をつかみ、引っ張りあっていた」

葵「涼介、お隣にいる人、どちらさん？」

涼介「看護士の、真奈美さん」

真奈美「はじめまして」

葵「ていうか、なんで下の名前で呼んでるわけ？」

涼介「仲良くなってさぁ・・・・・・」

葵「車椅子を借りに行っただけでしょ？」

真奈美「はい、お持ちしました」

満里奈「ちょっとあんた、涼介から離れて。距離近くない？」

涼介（Ｍ）「二人の血走った眼差しに射貫かれながら、オレは真奈美さんのサポートで、爺ちゃんを車椅子に乗せる。そして、病院の中庭へと連れ出した」

満里奈「ねぇ、お爺ちゃん花壇に並んだ向日葵（ひまわり）みてるよ」

涼介（Ｍ）「それをみてるって、いうんだろうか……オレには、視線が合ってないように感じられた」

真奈美「あの、思いつきですけど、お爺ちゃんに涼介さんのサックス、聞いてもらってはどうでしょう？」

満里奈「あ、なるほど、アリかも。お爺ちゃん、一度も聞かせてもらってないって、嘆いてたし」

涼介「音楽で食えるようになったら、招待するつもりでいた」

葵「ていうか待った！　なんであの人がサックスのこと知ってるわけ？」

涼介「仲良くなっちゃってさぁ」

葵「打ち解けすぎでしょ、いつの間に」

真奈美「うちの病院、毎月一回慰問コンサートを開催してるんです。せっかくだから、どうでしょう？　お爺ちゃんだけじゃなくて、みなさんに聞いてもらってはどうでしょう？」

葵「そういう話なら、悪くないね。私も乗ってあげる（上から目線）。涼介、一緒にどう？」

涼介「いや、オレはもう・・・・・」

葵「（遮り）それ以上は言わせない。涼介の人生に、音楽は必要だと思う。だから私が、やめさせない」

真奈美「葵さんも、お手伝してくれるんですか？」

葵「お手伝いじゃない。私こうみえてコレするんだから、コレ、わかる？　この絵になるジェスチャー」

真奈美「リストカットですか？（天然）」

葵「ヴァイオリン！　こんな大振りにリスカするヤツいたら、怖いわッ！」

真奈美「あぁびっくりした。それじゃ来週になりますけど、お願いしますね」

SE　ドア開く

涼介（M）「リハビリ病棟に戻ると、親戚のおばさんが来ていた」

親戚「難しいと思うよ」

涼介「ほんの少しで、一瞬でもいいんです。
　爺ちゃんと普通に、話ができたら・・・・・・」

親戚「して、どうするのさ」

涼介「工場の引き渡しが迫ってるんです。爺
　ちゃんの意志を、どうにか確認したい」

親戚「仕方のないことだよ。この日は、来る
　べくして来たんだ。おばさんはそう思うこ
　とにした」

満里奈「そうそう、涼介はお坊さんになって
　うちの寺を継ぐんだし、もういいじゃない」

葵「絶対そうはさせない」

満里奈「おまえに決定権はない」

葵「おまえって言うな。私にも名前がある。
　神楽坂葵、キラキラしてるでしょ」

満里奈「じゃ、カグラーか」

葵「カグラー？」

涼介「おい、ちょっと待ってくれッ。アレ！
　（をみてよ）」

葵・満里奈「なに？」

涼介（M）「振り向くと、爺ちゃんが棚の上の写真をじっとみていた」

涼介「おばさん、あの写真……」

親戚「あぁアレね、茂さんと奥さんは、毎年のように伊勢神宮へ行ってたから。たしか新婚旅行もそうだったし」

涼介（M）「それは、おかげ横丁で並んで立つ、爺ちゃんと婆ちゃんの記念写真だった。オレは手に取り、爺ちゃんのそばに寄り、その硬直した手に、しっかりと握らせる」

葵「もしかして、わかるんじゃない？　奥さんのこと、伊勢神宮のこと」

涼介「爺ちゃん、わかるのか？」

茂「……」

涼介（M）「けれど爺ちゃんは、言葉を返してくれない。ガガ、とも言ってくれない」

葵「お爺ちゃん連れてさぁ、いっそのこと、伊勢神宮まで行ってみない？」

満里奈「おい、中庭の次は伊勢かよ。無駄足になるって」

葵「そんなのわかんないよ」

満里奈「つーか、コンサートどうなった？

演奏聴いてもらうんでしょ？」

涼介「この際、なんでもやってみるか」

SE　ションヘルの稼働音

涼介（M）「オレには、婆ちゃんの記憶がない。物心ついたときにはすでに、仏壇に、婆ちゃんの遺影があった」

美佐紀「お婆さんは問屋の娘でね、お爺ちゃんに惚れるより先に、うちでつくった生地に惚れちゃってさ、お見合い結婚なんだけど、会う前から嫁入りを決めてたって」

涼介（M）「伊勢まで爺ちゃんを連れて行くことに、母さんは反対しなかった。ただ懐かしむように、婆ちゃんの思い出話がでてくるのだった」

美佐紀「で、この男勝りなさぁ、一人娘が産まれたわけなんだけど、私の子守歌はね、

ションヘルのガッチャン、ガッチャン。お婆さんは私をおんぶしたまま、動かしてたって」

涼介「なんか爺ちゃんとかぶるね。仕事の鬼」

美佐紀「私が結婚した頃、お婆さんは大病を患った。みんな働き過ぎだって言ってた。二人の最後の思い出も、それこそ伊勢神宮だったと思うよ」

涼介「オレ、伊勢神宮でググったんだけど、案の定、機織りと関係があった」

美佐紀「そうよ。天照大御神の機織り小屋が『古事記』にでてくるし、神御衣祭（かんみそさい）といって、絹と麻の反物を供える行事もある。つながりがあるのよ。だからお爺ちゃんとお婆さんは、お伊勢参りが好きだった」

涼介「商売繁盛を祈ってた？」

美佐紀「違う違う。願掛けをしに行くところじゃないから、お伊勢さんは。そうじゃなくて、最高の、本物の生地をつくり続けていきたいって、誓ってたみたい」

涼介「最高の、本物の生地……」
美佐紀「お婆さん言ってた。生地にふれただけで、偽物か本物かわかるって」
涼介「そりゃ質の違いはあるだろう」
美佐紀「それだけじゃないのよ」
涼介「というと？」
美佐紀「昔はね、それこそ本物の職人たちがたくさんいた。機織りだけじゃない。大工さんも料理人も、衣食住のすべてにわたり、職人が競うように技を磨いていた。『兵（つわもの）どもが夢の跡』って言うじゃない」
涼介「あぁ、松尾芭蕉の句ね」
美佐紀「あれ、私には消えてしまった職人たちを、歌っているように聞こえる」
涼介「今でも職人はいるだろう」
美佐紀「随分減ったと思う。そしてまた一人、お爺ちゃんがね……本物をつくれる人がどんどんいなくなっていく」
涼介「あの運送屋の常務、本物なんて要らない、って言ってたな」

美佐紀「お婆さんのように、本物がわかる人も減ったからね。それが今という時代なんだろうけど、代わりに、失ってしまうものがある」

涼介「失うもの？」

美佐紀「本物には、職人の魂が宿ってる。モノの良し悪しだけじゃないのよ。職人たちに囲まれて生きていた昔の生活は、むしろ今より豊かだったと思う。そこには人間らしい、本当の生活があったと思うから」

涼介「本当の、生活……」

美佐紀「お婆さんが亡くなるとき、『最高の人生をありがとう』って、お爺ちゃんに言ってたわ。二人で本物を求めていたから、そこには本当の人生があったんだと思う」

涼介「……婆ちゃんと、話がしてみたかったな……」

美佐紀「さぁ行ってきなさい、伊勢神宮へ、お爺ちゃんと一緒に。なにか新しい発見が、あるかもよ？」

ＳＥ　雨の音

涼介（Ｍ）「出立の日は、あいにくの雨だった。レンタカーを借りて、葵、満里奈、爺ちゃんと四人で、東名阪道に乗る」

茂「ガ、ガガ、ガ」

葵「涼介、お爺ちゃんなにか言ってるよ」

涼介（Ｍ）「後部座席では、葵が爺ちゃんに付きっきり」

満里奈「翻訳がいるね」

葵「ガガって、なにを意味してるんだろう」

涼介「とくに意味はないだろう」

葵「そうかなぁ？」

満里奈「ていうかさ、この際ハッキリしておきたいことがあるんだけど」

葵「なに？」

満里奈「カグラーがこうも涼介に付きまとう理由、教えてほしい」

葵「理由もなにも、普通に彼女だし」

満里奈「別れたんでしょ？　ねぇ、涼介」
涼介「ン、まぁ……（返答に窮する）」
葵「雨降って地固まる、って言うじゃない」
満里奈「地固まってないでしょ、降りっぱなしでしょ、雨。ていうか、リアルに降ってるし」
葵「大丈夫、天気予報じゃ午後から快晴」
満里奈「関係ないし」
葵「はいはい、わかったわ。それじゃ私の恋バナ、聞いてくれる？　私ね、好きでもない人と、政略結婚させられそうになったことがあるの」
満里奈「政略結婚？　戦国時代か」
葵「人を顔で判断するのはよくないけど、相手は、イルカとカメレオンを足して二で割ったような感じだった」
満里奈「ごめん想像できない」
葵「涼介とは出会ったばかりだったけど、私泣いて頼んだっけ。『彼氏の役お願い』って。そしたら涼介、パパの前に出てくれた。

存在自体パワハラって、会社じゃ評判のパパなのよ。それなのに涼介、堂々と『世界三大美女、クレオパトラ、楊貴妃、小野小町に次ぐ、葵さんをください』って、言ってくれたのぉ」

涼介「そんな枕詞、つけたか？」

葵「パパ、怒髪天をついたけど、涼介は臆すことなく、なんと！　まるで映画のようにね、三日三晩、パパの許しがでるまで、家の前に立ってくれた。カッコよすぎぃ！」

涼介「時給五千円って言うし」

葵「でもパパは『葵はパンドラの箱入り娘だ。絶対に渡さん！』の一点張り」

満里奈「パンドラの箱は、開けちゃいけない箱だしね」

葵「その代わりママが、交際を認めてくれたわけ。どう？　感動ストーリじゃなくて？泣けてこない？」

満里奈「泣けるツボがどこにあるか、逆に教えてほしいわ」

葵「結論だけ言うと、私と涼介は婚約してるってことよ。少なくともママは公認」

満里奈「それ、偽装でしょ？」

葵「なに言ってんの。契約結婚がホントの結婚に変わっちゃうドラマとか、あったじゃない。その類よ」

満里奈「だいぶ違うと思うけど」

葵「それに涼介はなんと言っても、私のヴァイオリンをね、最初に認めてくれた大切な人なの。涼介がいなかったら、私は今日まで続けられなかったと思う」

満里奈「要するに、ヘタクソってことね」

葵「どうやら、死にたいらしいな！」

満里奈「うわ！　首絞めるな！　助けて、涼介！」

ＳＥ　車のスリップ音

涼介「やめろ！　事故るぞ！」

茂「ガ、ガガ、ガ」

葵「それだけじゃない。涼介はね、私の、はじめての人なんだからッ！」

満里奈「え？」

葵「車から、落ちちゃえ！（照れ隠しのありえない暴力）」

満里奈「ドア開けようとしてる！」

涼介「やめろって！」

茂「ガ、ガガ」

SE　スマホの着信音

満里奈「ストップ、ストップ！　カグラーのスマホ鳴ってる」

葵「わかってるし……（電話にでて）もしもし」

満里奈「ふぅ、ガチで死ぬかと思った」

葵「（通話中）うん、うん、わかった」

満里奈「涼介、こんな狂暴女の、どこに惚れた？」

涼介「あぁみえて弱いところもあるんだよ。家庭的だしね」

満里奈「ギャップ萌えかよ……ン？　カグラー、どうした？　黙り込んじゃって」

葵「……」

満里奈「反省してる？　天国への階段、半分
昇ってたよ」
葵「検査結果が、でたの……」
満里奈「検査結果？」
葵「私、妊娠したみたい」
満里奈「は？　相手は？　カメレオン？」
葵「涼介」
満里奈「え？　……ちょっと、前にトラッ
ク！」
茂「ガガ！」
満里奈「涼介！　なにフリーズしてんの！（危
ないッ）」

SE　車のスリップ音
事故りそう……

《第二話了》

【第三話】

SE　車が走る

涼介（M）「満里奈と葵のせいで、あやうく事故りそうになったが、とりあえず無事に、伊勢神宮まで辿り着いた。が……」

満里奈「妊娠って、どういうこと！」

葵「そのままでしょ。涼介の子どもがいるの、こ・こ・に」

満里奈「（涼介に）顔面蒼白だよ。望まぬ妊娠だったんだでしょッ」

涼介（M）「とまぁ、こんな具合で、事態の収拾がつかない」

茂「ガ、ガガ」

葵「どうしたの？　お爺ちゃん」

茂「ガガガ」

満里奈「……伊勢うどんが食べたいって」

涼介「ホントかよ？」

涼介（M）「とはいえ、もう昼だし、オレたちは腹ごしらえすることにした。が、トラブル発生。どうやって爺ちゃんに食べさせたらよいのか、わからない」

茂「ガ、ガガ」

涼介（M）「うどんを箸でつまみ、お口へもっていくと、プイと、横向かれてしまう。強引に食べさせようものなら・・・・・・」

茂「ガガ！　ガガ！」

涼介（M）「牙を向く、野良猫のようになる」

葵「うどんがなにか、わかってない感じ」

満里奈「脳がダメになると、こうまでなっちゃうんだね。絶望的・・・・・・」

涼介「いや、諦めるにはまだ早い。これからだよ。脳のどこかに、記憶の欠片が残ってるかもしれない」

満里奈「記憶の、欠片？」

涼介「あるいは頭じゃなくてさ、体が覚えてることもあるし。伊勢神宮のどこかに、眠

ってる記憶を刺激する場所がさ、あるかもしれない。もしちょっとでも記憶が戻ったなら……」

満里奈「お爺ちゃん復活？」

葵「そんな奇跡を、信じてみたくもなるよね」

涼介（Ｍ）「オレたちは……」

満里奈「なにアレ！　プリンにソフトクリームのってるよ。買ってくわ」

涼介（Ｍ）「とかいう観光モードの満里奈を置き去りにし、おかげ横丁に入った。爺ちゃんと婆ちゃんの写真は、ここで撮ったものだ」

葵「お爺ちゃん、おかげ横丁、わかる？」

茂「ガ、ガガ」

涼介（Ｍ）「ところが、機械的な反応しか返ってこない」

満里奈「完全に終わってる。ここがどこなのか、まったく理解してない」

葵「まだ時間あるし、いろいろ回ってみましょ」

涼介（M）「午後三時というのは、なにかを始めるにはもう遅いか、あるいは、逆に早すぎるかだ、と言ったのはサルトルだが、たしかに、中途半端な時間帯。宇治橋の人通りは少なかった」

茂「ガ、ガガ」

満里奈「え？」

茂「ガガ！」

涼介（M）「車椅子を押す満里奈に、突然、爺ちゃんが抵抗を示した」

満里奈「ごめん、代わって」

涼介（M）「葵にバトンタッチすると、爺ちゃんが穏やかになる」

満里奈「どういうこと？」

葵「わかんないけど、なんか右側に寄ると、落ち着くみたい」

涼介「…………オレ、わかったかもしんない。宇治橋は右側通行なんだよ」

満里奈「え、嘘？　それがわかってるってこと？　もしそうなら、期待できるね！」

涼介（Ｍ）「と、喜びも束の間、爺ちゃんの反応はそれっきり。神苑を通り、手水舎で身を清め、（パンパンと拍手）正宮で参拝しても、爺ちゃんは無関心＆無感動」

満里奈「なんてこった。前言撤回するわ」

涼介「婆ちゃんとの想い出は、なんだったたんだよ。マジで悲しくなる・・・・・・」

葵「あ、お爺ちゃん寝ちゃった」

満里奈「ホントだ、寝息たててる」

葵「・・・・・・ねぇ、どうする？」

涼介「どうするもなにも・・・・・・」

満里奈「やっぱり無駄足になったか」

涼介「無駄足ねぇ・・・・・・せっかく来たんだし、倭姫宮（やまとひめのみや）くらい、寄ってくか？」

満里奈「なんで？」

涼介「昔々倭姫がいました。天照大御神を祀るにふさわしい場所を求め、旅に出ました。その途上、我らが一宮に立ち寄り、一時的にせよ、天照大御神を祀ったとさ」

満里奈「一宮人なら行くべし、ってこと？」

ＳＥ　スマホに着信

葵「涼介、電話だよ」

涼介「オレか（電話に出て）もしもし……」

満里奈「おいしものでも食べて、帰る？」

葵「一つくらい、爪跡残したいしね」

涼介「（通話中）うん、うん、わかってる、みんなが知ってる曲も入れるし」

満里奈「なんか、音楽の話してるよ」

葵「みたいだね」

涼介「（通話中）あぁなるほど、童謡もアリだと思う」

満里奈「イモコンの段取りじゃない？」

葵「イ、イモコン？」

満里奈「慰問コンサート」

葵「え？　私が窓口なんだけど」

涼介「（通話中）うん、じゃ、また後で電話するし。待ってて（通話おわり）」

葵「誰と話してたの？」

涼介「真奈美さんだよ。コンサート、九日に決まった」

葵「え、明後日じゃない。ていうか、乗り気じゃなかったくせに」

涼介「ひっきりなしに電話がきてさ、真奈美さん、顔に似合わず強引なんだわ。あ、倭姫宮、ナシね。今夜会う約束したし」

満里奈「今夜？　遅くならない？」

涼介「だから速攻帰ろう」

葵「真奈美さんのために？」

　　ＳＥ　スマホに着信

涼介「あ、また真奈美さんだ。（電話に出て）もしもし……え？　ピアノ弾けるの？　マジ？　絵になるなぁ。伴奏してよ。オレ、真奈美さんとコラボしたい。うん、わかった、練習にも付き合うし」

涼介（Ｍ）「と、オレの視界の片隅で、満里奈と葵の背中が、遠ざかっていく」

涼介「真奈美さん、ちょっとごめん。（二人に）おーい！　どこ行くのッ？」

涼介（Ｍ）「二人は並んで振り向くと、オレに中指を突き立ててきた」

満里奈「カグラーと、松坂牛行くからッ！」
葵「くたばっちまえ！　アーメン！」
涼介「どうやって帰るんだよッ？」
満里奈・葵「電車に決まってんでしょ！」

SE　車が走る

涼介（M）「とりあえず、満里奈と葵の関係が修復したのは良いことだ、と自分に言い聞かせる。オレは爺ちゃんと二人で、夜の高速をひた走る」
涼介「なぁ爺ちゃん、工場が他人（ひと）の手に渡っちまうけど、いい？　許してくれる？」
茂「ガ、ガガ」
涼介「爺ちゃん、いまなんて？」
茂「…………」
涼介「聞こえてるわけ、ないか…………」
涼介（M）「オレはＳＡ（サービスエリア）で車を止めると、トランクから、ウール地の着物を取り出す。妙林寺の老師から預かったものだ。オレは、

最後の賭けにでる。車椅子の爺ちゃんを外へ連れ出し、着物を着せる」

茂「ガ！　ガガ！」

涼介（M）「抵抗されたって、かまやしない」

茂「ガガ！　ガ！」

涼介（M）「爺ちゃんは、きっと想い出す。だってこの着物は、ションヘルで織り上げた、この黒無地の着物は、爺ちゃんの魂が宿った、最高傑作なんだから！」

茂「ガガ！」

涼介「想い出せって！」

茂「ガガ！」

涼介「忘れんなよ！　こんなに大切なもの・・・・・想い出してくれよ、爺ちゃん・・・・・・」

茂「（激しく）ガガ！　ガガ！」

涼介（M）「オレの手が、自然と止まる。苦しそうにもがく、爺ちゃんをみて、止まってしまう。着物が、アスファルトの地面に落ちて、爺ちゃんの車椅子が、踏んずけてしまう・・・・・・オレは汚れちまった着物を拾

い、たたみながら、泣けてきた。誰にもみられてないのをいいことに、泣いた・・・・・」

SE　雨の音

涼介（Ｍ）「八月九日、演奏会の日も雨になった。ロビーにパイプ椅子が並び、お客さんが数十人・・・・・現在従業員寮に居候中の葵とは、あれから口きいてなかったが、ヴァイオリンにふれると、さすがにモードが変わるようで、ぶっちゃけ安心した」

葵「私はどんな場所でも一〇〇%でやる主義だから、ついてきてよ」

涼介「百も承知だ」

Ｍ　演奏

ある程度演奏が流れたところで、

涼介のモノローグを重ねる。

涼介（Ｍ）「客席にいる爺ちゃんが、オレをみている。けれど、その表情をみれば音が届いてないことが、爺ちゃんの心に響いて

ないことが、わかってしまう・・・・・オレは偽物さ。爺ちゃんのように、本物にはなれなかった。だから演奏を聴いてもらうのが怖かった。爺ちゃんの目は、誤魔化せないと思っていた・・・・・期待に沿えなくて、ごめんよ。でも、それでも聴いてほしいと思う。これが、ありのままのオレだから」

　　演奏F・Oで、拍手喝采！

葵「涼介の音、いつもと違ったね」

涼介（M）「ヴァイオリンをケースに収めながら、葵が言う」

葵「憑き物が落ちたみたいに、なんていぅか、透明だった」

涼介「葵の方こそ違ったよ。なんかオレ、支えられてるように感じた」

葵「なんでだと思う？」

涼介「なんで、かな・・・・・」

葵「今日は、お客さんのために弾いたんじゃない。涼介のために弾いたんだよ。音楽、やめないで」

涼介「それは……」

真奈美「（拍手しながら）涼介さん、とっても素敵な演奏でした」

涼介「ありがとう。真奈美さんこそピアノ、上手じゃないですか」

真奈美「学園祭以来ですよ」

涼介「とはいえ、爺ちゃんがやっぱり反応なし、でしたね……」

真奈美「仕方ないですよ。やれるだけのことは、やってみたんです」

満里奈「バッカじゃない！」

涼介（Ｍ）「振り向くと、いきり立った満里奈と葵が、なぜかしら取っ組み合いになっていた」

満里奈「みせつけなくたっていいじゃない。息ぴったりだし。イラつくわぁ」

葵「これでわかったでしょ。私たちには絆があるのよ」

満里奈「絆？　はぁ？　こっちにだってあるし。私誰でもよくて涼介にくっついてると、

そう思ってない？」
葵「そうでしょ。結婚願望強すぎて、リミッター解除されてる感じだし」
満里奈「私たち、保育園のときから一緒なんだからッ。こっちにだって絆はある」
葵「でも付き合ってはいない？」
満里奈「お互い、言い出せなかっただけ！」
葵「なにを？」
満里奈「そんなのわかるでしょ、鈍感！」
葵「え？　それって……」
満里奈「相思相愛！」
葵「ウソ、絶対ウソだ。涼介、真鍋のこと好きだった？　ありえんでしょ」
涼介「一宮での想い出はすべて、上京するときに置いてきた（茶化す）」
葵「気取ったセリフで、煙に巻かないで」
満里奈「だから東京なんて、行ってほしくなかったんだ」
葵「ついて来たらよかったでしょ」
満里奈「足手まといになるのは、わかってる

し。だから涼介が一宮に帰ってきてくれて、私（涙ぐみ）嬉しかったんだよ」

葵「泣き落とし？　柄にもない。涼介を好きになった理由、私も真鍋に言ったんだからさ、あなたも言いなさいよ。ここですべて、ハッキリさせましょうよ」

満里奈「小学生のとき、ホームルームの時間で、私、オナラしちゃったの・・・・・」

葵「は？」

満里奈「ぷ～んて臭いが広がって、犯人探しみたいな感じになっちゃって、私もうマジ首吊って死のうと思ってたら、涼介、頭ぽりぽり掻きながら、席を立ち、『ごめん、オレ』って言ってくれたのぉ」

葵「ほー」

満里奈「涼介は、満里奈を護ってくれるナイトだと思った」

葵「まったく共感できない」

満里奈「次は、涼介の番だよ」

涼介「なにが？」

満里奈「決めてよ」
涼介「なにを？」
満里奈「カグラーの話も、私の話も、ぜんぶ聞いたよね。カグラーか私か、決めてよ」
涼介「そんなことより、わかってる？　明日だぞ、工場の引き渡し」
葵「うわ、露骨に話を逸らそうとしてる」
涼介「だって考えなきゃいけない優先順位は……」
葵「（遮り）工場の方が大事ってこと？」
涼介「そうは言ってない」
満里奈「もういいから、さっさと選んでよ！私か、カグラーか」
涼介「……そりゃ、ケジメはさ、つけなきゃいけないと思ってるよ」
満里奈「ケジメ？」
涼介「男として、責任はとらなきゃいけないと思ってる。こんなオレが全うな親になれるかって不安は、将来ハゲるんじゃないかって不安の百倍はあるけれど」

満里奈「責任？　あぁ、そういうことか。ふ～ん、カグラーよかったじゃん。身籠ったもん勝ちだ。やんなっちゃう」

葵「やめてよ。そんな理由で選ばれたくない。妊娠したなんて、ウソだし」

満里奈「は？」＆涼介「え？」

葵「だからぁ、ウソなのよ、ウソ！　涼介を試しただけ」

涼介「マジか」＆満里奈「冗談じゃない」

葵「でもこれで、立場は対等でしょ」

満里奈「たしかに、敗者復活戦の気分」

真奈美「涼介さんて、モテるんですねぇ」

涼介「イイところに来た、真奈美さん。そうなんだよ、オレが好きなのは、真奈美さんなんだよ！」

満里奈・葵・真奈美「はい？」

涼介「ということに、しておいて。じゃね！」

葵「逃げないで！」＆満里奈「足はやッ」

ＳＥ　ションヘルの稼働音

涼介（Ｍ）「家に帰ると、閉鎖中の工場で、
　ションヘルが動いていた」
涼介「片岡さん、ひとりでなにしてんの？」
片岡「仕事納めだよぉ」
涼介「酔ってるでしょ？」
涼介（Ｍ）「片岡さんの足元には、飲み潰し
　た缶ビールが並んでいた」
片岡「明日だろ、あいつが来んの」
涼介「すみません。最後まで爺ちゃんの意志
を、確認することができませんでした」
片岡「いや、案外それでよかったのかもしれ
ん。知らぬが仏、って言うじゃない」
涼介「その使い方、合ってます？」
片岡「細かいこと言うなよ。社長はさ、こい
つの（ぱしんと機械を叩く）、ションヘル
のことをさ、『がちゃまん』て呼ぶんだわ。
がちゃまん景気の恩恵なんざぁこれっぽっ
ちも受けてねぇってのに、なんだろう、こ
のガッチャン、ガッチャンの音がさぁ、わ

しらを景気づけてくれるのさ。苦しくとも、悲しくとも、ガッチャン、ガッチャンで忘れちまう。楽しいときはさ、このガッチャンで、ビールが何杯もいけるぞ。わしらの人生を一言で表すなら、がちゃまんだッ。だから『ありがとう』って言いたいよ。こいつら、がちゃまんに」

涼介「片岡さん・・・・・」

美佐紀「ちょっとぉ、事務所の片付け、手伝ってくれない？」

片岡「わかったよ、そっちへ行く」

涼介（M）「オレは、誰もいなくなった工場に、がちゃまんたちに、お疲れ様、と言ってやりたい気持ちになった」

ＳＥ　激しい雨

涼介（M）「夜は土砂降りになった。どうにも眠れない。真奈美さんが明日、爺ちゃんを連れて来るという。妙林寺の老師も立ち

会いたいと言ってきた。従業員もみな、一人残らず出て来ると言う」
満里奈「私カメラ持ってくから、全員で写真撮ろうよ」
葵「ションヘルで織った生地、少しもらってもいい？　記念にとっておきたい」
美佐紀「涼介はどうするの？　東京へ戻る？」
涼介（M）「ぶっちゃけ、なにもわからない……」

間

涼介（M）「そして、朝が来た……」

SE　人だかり（ガヤガヤ）

美樹本「たしかに、契約書は受け取りました」
美佐紀「こちらは工場の鍵一式です」
涼介（M）「母さんが、押印した契約書とキーボックスを美樹本常務に渡す」
美樹本「なんかやけに人が集まってるわね。物見遊山でもあるまいし。さぁこの瞬間か

ら、君たちは部外者！（手を叩き）散った、散った！」

満里奈「待ってください。写真を一枚、撮らせてください」

美樹本「それくらいなら、構わないけど」

満里奈「と、いうことなんで（大声で）は～い、みんなぁ、集合ぅ！」

葵「ちょっと涼介、そこ空けなさいよ。センターはお爺ちゃんでしょ」

涼介（M）「真奈美さんが、車椅子の爺ちゃんを押してくる」

美樹本「これはこれは、はじめまして。あなたが、社長さんですね」

茂「……………」

美樹本「どうやら、言葉が通じないみたい」

満里奈「あの、そこにいると、写真に入っちゃうんですけどッ」

美樹本「（満里奈に）はいはい。（美佐紀に）奥さん正解だわ。こんな老いぼれに頼ってるようじゃあ、どのみち先がみえてた」

葵「そこも！　写ります」
美樹本「わかったから、さっさと済ませてくれない」
満里奈「はい、涼介、カメラ」
涼介「え、オレが撮るの？」
涼介（Ｍ）「尾藤毛織ゆかりの面々を、レンズ越しに覗く。爺ちゃんの隣には、妙林寺の老師が立っていた。お互い本物を、本当の生活を求めて闘った、戦友のように感じられる」
片岡「ちょっと待ったぁ！（大声）」
満里奈「片岡さん、声でかッ」
片岡「最後にがちゃまん、動かそうぜ！」
葵「写真に音は、入りませんよ」
片岡「細かいこと言うなよ」
美佐紀「最後の打ち上げ花火か。悪くないわね。やっておしまい！」
涼介（Ｍ）「片岡さんが、満面に笑みを浮かべ、駆けていく。熟練の、慣れた手つきで、ションヘルを動かしていく」

ＳＥ　ションヘルの稼働音

片岡「涼介！　聞こえるかッ？」

涼介「はい？」

片岡「（大声で）聞こえるかッての！」

涼介「聞こえてますよ」

片岡「わしの声じゃねぇって。こいつだよ、がちゃまんの音だ。わしらの、尾藤毛織のがちゃまんだ！　おまえがサックスなら、わしらはがちゃまんの演奏家だ！　この音と共に、がちゃまんと一緒に、尾藤毛織は百年、やってきたんだぜッ！」

涼介（Ｍ）「そうだ、忘れていた。母さんも赤ん坊だったオレをおんぶして、ションヘル動かしてたっけ。オレも同じだ。オレもこの音の中から、生まれてきたんだ」

葵「涼介、ちょっと！（叫ぶ）」

涼介「（がちゃまんの音がうるさくて）なに？聞こえない」

満里奈「こっち来て！　早く！（さらに大声で叫ぶ）」

涼介（Ｍ）「二人が手招きするから、寄ってみると・・・・・爺ちゃんが、泣いていた。半分だけ開いた、半眼の眼差しから、濁りのない透き通った雫が、溢れて、こぼれ落ちて、頬を濡らしていた」

美佐紀「こんなことって・・・・・」

涼介「爺ちゃんッ、がちゃまんが、わかるんだね！　がちゃまんが！」

茂「ガ、ガガ、ガ、ガガ・・・・・」

満里奈「私わかった！　ガ、ガガって、がちゃまんの音だったんだッ」

涼介「爺ちゃん、動いてるよ、がちゃまんが、動いてるよ・・・・・」

茂「ガ、ガガ、ガ、ガガ」

涼介「爺ちゃん・・・・・」

葵「涼介、どうするの？　これでおしまいにするわけ？」

涼介「常務さんッ」

美樹本「なんだね？」

涼介「契約書、返してくださいッ」

Ｍ

ＳＥ　慌ただしく、階段を昇る

片岡「昨日始末したばっかなのに、また事務
　所復活かよ」
美佐紀「愚痴ってるわりには、顔が笑ってる
　けど。はい、そのダンボールは、そこッ」
満里奈「お母様ぁ、新規の取引先が、決まり
　そうなんですけど」
美佐紀「は〜い、電話、代わるわね」
葵「涼介、私これからもずっと、ここでお世
　話になることにした」
涼介「これからも、ずっと？」
葵「やってみたいことができたの。生地を織
　るだけじゃなくて、デザインもして、服を
　つくるの」
涼介「ブランドを立ち上げるってこと？」
葵「そうよ。ギャルソン・デ・コムデ」

涼介「それパクリでしょ」

葵「それに、バックアップも万全だからね。
資金調達は、パパ・デ・ホットライン！」

涼介「それは頼もしい」

葵「つまりメインバンクは、私ね。ここにハンコ、お願いします」

涼介「わかったよ・・・・・ン？　これ婚姻届じゃね！」

満里奈「待てーい！　ちょっと目を離したすきにぃ、押すなら、私のにでしょ！」

葵「私のにですぅ」

満里奈「ていうか涼介、ハンコ握ってんなら、今ここで、どちらかに押しなさい！」

涼介「わかったよ。今日こそハッキリする」

満里奈「イイ心がけだ」

葵「さぁ、どっちを選ぶ？」

涼介「オレは・・・・・」

満里奈・葵「オレは？」

涼介「がちゃまんと結婚する！」

満里奈・葵「はい？」

ＳＥ　ションヘルの稼働音
その音に、涼介のモノローグを
重ねる。

涼介（Ｍ）「この、がちゃまんの音が、眠っ
ていた爺ちゃんの魂を揺り動かした。オレ
は、ついにみつけた。がちゃまんが奏でる
この響きは、職人たちの魂は、本当の、本
物の、最高の音楽だと思う！」

ションヘルの音を、次第に大きく
していく。
そして、Ｆ・Ｏ

《第三話了》

『がちゃまん！』了

〔登場人物表〕

尾藤　涼介（三二）
真鍋　満里奈（三二）
神楽坂　葵（二九）
尾藤　美佐紀（五四）
美樹本　優子（六〇）
親戚の叔母さん（七〇）
看護士の真奈美（三〇）
真鍋　道信（六〇）
妙林寺の老師（八一）
妙林寺の雲水（三五）
片岡さん（七五）
美樹本の部下（四〇）
鰻屋の店主（六五）
尾藤　茂（八一）

※

この脚本の利用を希望される方は、事前にわたしどもアートポイエーシスまでご相談ください。よろしくお願いいいたします。

アート-ポイエーシス
https://art-poiesis.org
art.poiesis.2022@gmail.com